

云ふことを聞かぬ子どもに  
就いて

和田 實

教育の目的が適當と定められ、其方法が自然的な無理の無いものであつたなら、子どもと云ふものは、誰でも教育者の思ふ通りに、自由自在に、引き廻はすことが出来るかの様に、一般には、考へられて居るけれども、併し、事實は之を否定することが多い。實際、何處の幼稚園に行つても、保育上の難物と認められて居るものが二人や三人は必ずある。若し、大まかに歩合で云つて見たらば多くの子供の中には比較的難物が一割は必ずあると云つても然した大間違とはなるまいと思ふ。之は多勢の子供を管理する上から云ふたのであるけれど、尙一人一人の子供に就いて考へたならば特別な優秀兒でない限りは、之を教育者の理想に照して見ると必ず多少の缺點即ち短所を持つて居る

もので、何の子どもも一から十まで悉く教育者の目的通りに能く出来るものではないのである。斯う云ふと或は「それは教育者の技量が足りないからで、若し充分素養のあるものであつたら、そして其方法が充分當を得て居るものであつたら、如何なる子どもであらうと、教育者の希望通りにならぬものはない筈である。」と云ふものがあるかも知れないが、是はまた、餘りに早合點である。勿論、保母其人の技量で或程度迄は何んな子どもでも、取扱ひ得るには相違ない。が併し、何んな偉らい保母にしても、容易に引き廻はし得る子どもと、容易に引き廻はせぬ子どもとの別があり、そして其中に難易の程度があつて、最難物が數人あることは免るべからざる事實である。一人の子どもに就いて云へば、或點までは其子どもを充分教化し、努力せしむることが出来るけれども、何うしても、是以上は發奮させることが困難であると云ふ點があるに相違ない。是は議論ではなくて事

實である。所で、以上の事實は理論上果して正當のものであらうか否かと云ふことを考へて見ると、其處に多少の面白き點がある。左に少しく説明して見やう。先づ第一に教育の目的と云ふものに對して、子どもと云ふものは必然的に凡べての資性を一致せしめて居るものであるか否かと云ふことを考へて見るに、是は一致して居らぬ點が大にある、様である。何故と云ふに、一體、普通教育の目的と云ふものは社會生活を目安とした頗る人爲的のものであるから、其子どもも資質と云ふものには少しも頓着して居ない。故に、假令、兒童研究の結果を應用して一般に子どもに對しては此邊で我慢をしなければならぬと云ふ様な斟酌はするにしても、大體が何れも子ども其ものの個性を調査して、夫れに一致した所に教育の目的を置かうとしたものではないのであるから、教育の目的に對して、果して何れの子どもも何等の困難もなく一致するか、何うかと云ふことは定められた

問題ではないのである。云は、普通教育の目的(専門教育、職業教育の目的でなく)は教育者の考で勝手に極めた者であるから、之を子供の方の側から見れば、中には頗る好都合のものもあるに違ひないと同時に中には生れ付きが頗る教育の目的に遠くて教育者の希望する所に多くの點に於て副はぬと云ふ様なものもあるに相違ない。故に四十人の子どもの中には教育の目的を中心として其資性の最も好都合のものから順次に此中心の周圍に列べるとして考へて見ると其最後外周に立つた子供は大に教育者の努力を要し、苦辛を要するものがあるに違ひない。其中で特に程度の甚だきものは實に教育者の所謂難物である。是と同様で一人の子供に就いて考へても、其子どもも資性の全部が平等でない限りは、即ち或點に優り、劣り、を持つて居る個性である以上は其子供の全生活を悉く教育者の思ふ通り平等にせしむることは困難である。故に教育上の難物は常に多數の幼児中にあるばか

りでなく一人の子供の中にも見出すことが出来るものである。

以上は教育の目的の上からの觀察であるが、更に教育の方法の上から考へても亦同様な結果を見出すことが出来る。何故なれば、教育の方法と云ふものは成る程兒童研究の結果を應用して子供の心理生理に適つた方法を探るとしても、是は唯理論上に於ける一般論に過ぎないので、多くの子供が斯様であるから、此子どもも是でよからう位の所で實行するのである。決して綿密に其子供の個性に適するや否やを極めて而して後に施すのではないのである。又そんなことが事實出来る筈のものではないのである。唯教育者が實際に其子どもを扱つて居る中に漸次其子どもの個性を觀察した上は之を其方法中に採り入れて所謂、人を見て法を説く」の場合を生ずるのである。故に此域に達するまでは教育の方法其ものが既に子どもに全然適合したものと云ふ譯には行かぬので、従つて教

育者の指揮命令と云ふものは悉く何等の衝突なしに子供に受入れられる筈と極つたものではないのである。即ち、云ふことを聞かぬ子どもと云ふものが此方面からも生じ来る譯である。尤も此點は教育者其人の技量で速かに各個性を發見し巧みに適當な方法を應用することになれば大に免れ得る困難ではあるが併し、斯様に熟練した教育家と云ふものは極めて稀なもので、多くは教育者其人の個性に因つて教育の方法と云ふものは一定した型を持つたものである。甲の教育家が採る所の教育法は乙の教育家のするところとは必ず常に異つた點を持つて居るもので、甲には甲風の教育法あり、乙には乙風の教育法があるものである。教育家が此様に既に一定の型を持つて居ると云ふと子供の生活とは益能く衝突するもので、若し、頑固に此型を主張するならば其人は多くの子供を苦しめると云ふ結果になるに相違ない。以上の様な次第であるから、云ふことを聞かぬ子どもと云ふ

ものは全然ある可き筈のものではない。子供は徹頭徹尾教育者に従順である可き筈であると思ふのは少し早計で、實際は中々思ふ通りには子どもと云ふものは引き廻はす譯には行かぬものでありますから、一組の兒童中に多少の難物があつたにしても、何も直に自分の教育力を疑つて失望落膽するには及びません。之を大きくすれば教育の可能、不可能を論ずることにもなるし、教育の効力、教育力の限界と云ふ様なことを論ずることにもなるのでありますから六ヶ敷しいのは當然であります。それよりか難物があつたとしたならば、先づ第一に其原因が教育の目的と子どもの資性と一致しがたき爲めに然るものか、或は教育者其人の方法の不當なる爲めに生じた一時の現象であるかを、調べなければならぬ。故に其爲めには教育者は出來得る限り種々なる方面より色々に方法を變へ所謂手を代へ品を換へて子どもに當つて見なければならぬ。さうした上で、何うしても衝突の原

因が教育の方法の上にはないと極まつたらば、更に子どもの資性と教育の目的との關係に就いて調べねばならぬ。

次には此云ふを聞かぬ子供、是をば如何に處置す可きかが問題である。理論上、云ふを聞かぬ子供のあるのは當然のとであるからとて之を放任す可きか、或は教育の目的は嚴格なものであるから、子供は是非とも、是に副ふ様に教育されねばならぬ。従つて子供は是非とも、壓制しても教育者の指揮命令に従はしむ可きであるか何か、あまり大問題と云ふ譯でもないが序に考察して見ませう。先づ云ふことを聞かぬ子どもに對して教育の目的が讓歩する必要ありや否やと云ふことであるが、是は大體に於て、云ふまでもなく、教育の目的は嚴格なもので、さう妄りに讓歩し伸縮す可きものではないのである。其調べた結果に因つて、或は教育の目的を變更するか又は子どもを鞭達しても壓制しても是非とも

教育の目的を達せしむ可きかを考定す可きである。併しながら、教育の目的と云ふものは頗る嚴格に維持しなければならぬ。之が常に動搖する様なことでは教育の威厳を損じて、詰りは教育を普及することは出来ず、各人は唯各人の勝手に生育し成熟するのと同じことになつてしまふ。私は算術は嫌ひです。と云ふ子どもには、ウンさうかそれではお前には算術を抜いて遣らうと云ふ様なことをして居たのでは、教育は到底普及することは出来ぬ。故に教育の目的は出来る限り嚴格に維持しなければならぬ。即ち萬止むを得ざる限りは之を變更したり斟酌したりする必要はないのである。既に教育の目的が斯様に嚴格に守らるゝ必要ありとすれば、教育者の採る可き道は唯種々なる方法を盡くして其衝突を避けて、教育の目的を達する所に存すると云はなければならぬ。手取り早く云へば教育者は常に是等の教育的難物を一人の子どもに就いて云へば幾等かの難點前にして、

之と悪戦苦闘した上、何うにか斯うにか之を制伏して、以て教育の目的を達する所に教育者の仕事が存在するものと思はねばならぬ。尤も是を極端に云ふと普通一般の教育者と感化院や白痴院の先生との區別がなくなつて仕舞ふ様ではあるが是は是非もない仕儀である。實際の所、感化院白痴院の先生と普通一般の教師とは此悪童感化(普通教育の方で云ふと少し大げさで悪い言葉であるが)や資性改善と云ふこと丈で考へて見ると單に仕事の難易に程度の差があるのみで別段變はつたことではないのである。故に程度の低き改善的職業は普通教育の側に於ても無論行はなければならぬ。一人二人の輕き難物は無論専門の感化院や白痴院に送る迄もなく、普通教育の範圍で努めて改善を計らなければならぬことである。唯普通一般の教育者は是以外に他の普通兒や優秀兒を同時に教育して大に積極的に活動する任務を有することが感化院の先生や白痴院の先生と異なる所である。

要するに、所謂云ふことを聞かぬ子どもと云ふものは單に我儘や一時の事情で現はれるもの、外に、深き根帯を有する原因即ち教育の目的や方法が子どもの資性と觸接して教育と云ふ活動が起らうとする其所に根を持つた所の原因からして出で来るもので、何處の幼稚園に於ても、(又何の子どもを採つて見ても) 必ず一人二人は有る可き筈のもので之を全然除くなど、云ふことは事實空論に過ぎぬことであるから、教育者たるものは是等の事實に出會しても妄りに落膽したり失望したりしないで、常に如何にせば是等の特別兒を扱ひ得るかに就いて考慮して置いて、臨機應變の處置を巧みに採ることが必要である。此臨機の處置に就いて多くの輕験と多くの考案とを有する人が尤も老練なる教育家たるに必要な一資格である。

楠 母

は、そ葉のまもりしなくば桶の

このみ空しくくちぬべきかな

## 愛兒を失ひし二三の實例

戸 倉 廣 雅

三六

茲に教育なき母親の真心より出でた話の面白き實例を擧げて見る。余の近所に大木某といふのがある。向ふ三軒兩隣りの御多分の義理と缺かさぬ一と通りの交際をして居る。今日はとか、お早ふとか、今日は御天氣とか、いやとふも雨で困ります、御同様で位の會話は、これは男同志の普通例、この會話からは、別に何も湧いて来ないが、女同志は辭の多いもの、さてはや一寸往來の立話にも十分や二十分は物の數ではない。世間話や迷信話をよく聞かされて居るのは、余の妻君である。ところが此の大木某に二人の女の兒があつて姉のみね子は今年八歳での學齡兒近所の學校へこの四月入學したてのたいけ盛り、妹の貞子はまだ四つ五つの煩はなさ、いたづらが其の日の仕事、姉のみね子は惣領のことゝて、兩親の寵愛と一方なら